

# 高校生手打ちそばチャレンジ店による『そばの里』進展事業

会津山都そば協会

## 【事業の背景と目的】

福島県喜多方市山都町は、磐梯朝日国立公園に含まれる霊峰 飯豊山と一の戸川の清流に生まれた自然豊かな人情あふれる山里の町で、その自然を活かした地場産物に恵まれている。

中でも「山都そば」は、標高や寒暖の差が大きい風土条件により良質のそばが育つことで、古くから「そばの里」としての町おこしが行われ、広く名前も知られるようになった。

しかし、少子高齢化や若者の流出等により、かつて活気があった商店街も老舗そば店が閉店するなど閉塞感が生じている。

一方、山都地区内唯一の高校である県立耶麻農業高等学校は、生徒数が減少している中、自校で栽培する作物の販売や商品開発等を行っており、さらには 4ha の圃場で栽培したそばを製粉し、生徒の「そば打ち」の技術習得にも取り組んでいる。

この山都町の宝である「そば」を通じて、「元気がなくなりかけている地域」と「生徒数が減った農業高校」を連携する取り組みを地域全体で応援し、また広く情報発信することによって、両者の活性化を図るべく本事業を実施した。

## 【事業の概要】

高校生との協働による地域活性化活動に取り組むため、まずは先進的な取り組みを行っている講師を招いて研修会を開き、取り組みの方向性を関係者で共有するとともに、具体的な活動ノウハウの獲得を図った。

また、現在当会が一部の生徒に対して行っている手打ちそばの技術指導について、33年の伝統がある「山都新そばまつり」に出店できるレベルを目指して技術の向上を図るとともに、対面販売の実践練習の場として試食研究会を開催した。

## 【事業実施体制】

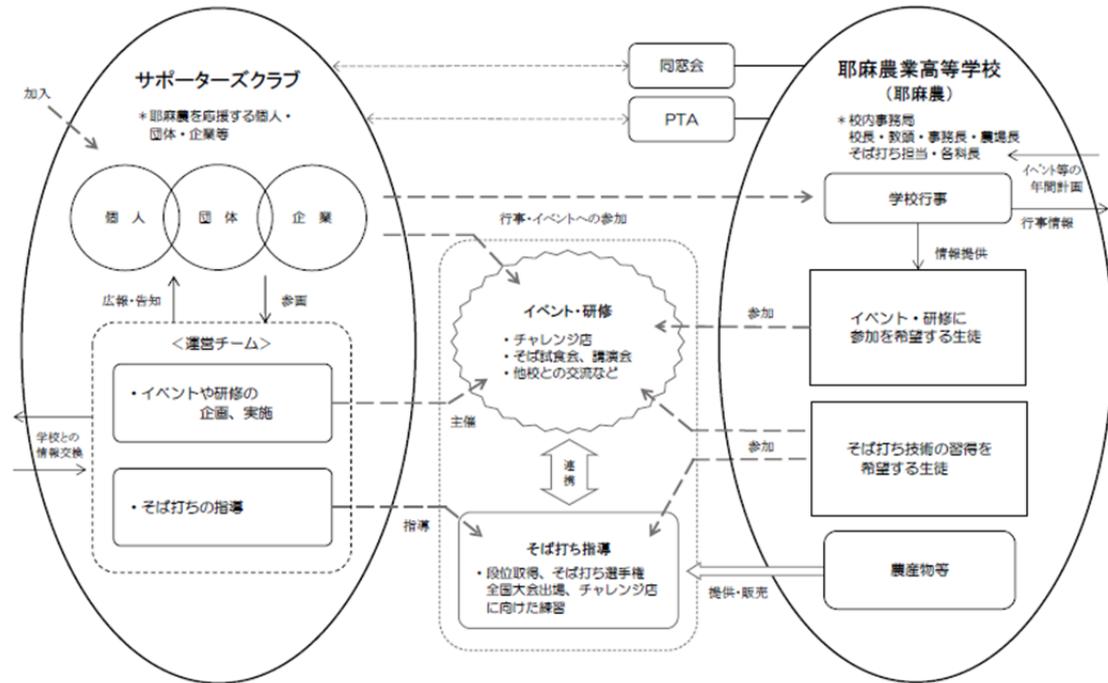
耶麻農業高校を中心に、これまで同校を様々な形で支援してきた団体が協力して事業を進めることになった。また、当協会が担当する そば打ち指導は、当面、同校のグリーンメイキング部でそば打ちを練習している生徒たち（通称「そば部」）を対象に行うこととした。

### \*主な関係団体

- ・会津山都そば協会：実施主体、そば打ち指導
- ・福島県立耶麻農業高等学校：共同実施
- ・喜多方ふるさと振興株式会社：販売実演の場の提供
- ・喜多方市山都総合支所、きたかた商工会：そばまつり実行委員会事務局

## \* 耶麻農サポーターズクラブの発足

従来から耶麻農業高校を支援していた団体等が、今回は同じ目標に向かって活動を行う必要があることから、同じ意志を持った団体や個人がともに同校を応援する組織として「耶麻農サポーターズクラブ」を立ち上げ、情報の共有と活動の連携を図ることとした。



今年度は活動の初年度ということもあり、クラブ員の加入を積極的に進めることができなかった点など、次年度以降の課題となった部分もあるが、これまではそれぞれが「点」として行っていた活動内容を互いに承知しあうことで、同じ目標を目指して活動するという点では一定の成果が得られたと考える。

### 【平成 28 年度の取組内容】

#### 1. 講演会の開催

事業に関わる学校関係者や各団体が、事業の目的と目指す方向性を共有するためのキックオフ・イベントとして講演会を開催した。



講師には、三重県に全国初の高校生レストランを立ち上げた岸川政之氏を招き、生徒や関係者に向けて話していただいた。

生徒に対しては自分たちの可能性を信じることを熱く伝えられ、また関係者の交流会では、地域のためよりも第一に生徒のことを考えることなど、学校と連携するうえでのアドバイスを受けた。

岸川氏には、その後 2 月にも来校の機会を得、今後の活動に関する相談や、様々な先進事例の紹介など、貴重な支援を受けている。

## 2. そば打ち練習の指導

毎週水曜日の放課後 19 時から 2 時間ほど、当協会の会員が、そば部の生徒たちに指導を行った。



8 月までは、そば打ち段位取得等で基準となっている二八そば（小麦粉 2 割）の打ち方で練習していたが、夏以降は、そばまつりの基準となるそば粉 10 割での打ち方に切り替えた。

この打ち方の違いを克服するまでには相当の時間を要し、当初予定していた 9 月のそばまつりへの参加は断念せざるを得なかった。

しかしそれによって生徒たちは一層練習に励み、特に 3 年生の 3 人は 10 割そばの打ち方を徐々に自分のものにしていった。

## 3. 試食研究会の開催

こうした練習の成果を地域の方々に披露する場として、また、そばまつり出店に向けた実践練習として、試食研究会を 3 回開催した。

- ・ 第 1 回： 8 月 8 日 耶麻農高内 （参加者 同窓会役員など約 15 名）
- ・ 第 2 回： 9 月 23 日 会陽館 （参加者 市内の社会人約 20 名）
- ・ 第 3 回： 10 月 30 日 耶麻農高内 （参加者 文化祭来場者約 100 名）



左の写真は、9 月 23 日に喜多方市が管理している蔵造りの文化施設「会陽館」で実施した際のものである。このころには生徒も 10 割そばの扱いに慣れてきており、参加者にそばの風味や食感を十分に楽しんでもらえる出来映えのものが提供できた。

参加者の中には、そば打ちを通して見たのは初めてという方もおり、パフォーマンスとしても楽しめる要素があることを確認できた。

## 4. そばまつりへの出店

これらの準備を経て、10 月 15 日・16 日の二日間、本事業の一番の目標であった「第 33 回 山

都新そばまつり」に耶麻農業高校として出店することができた。

当日は晴天にも恵まれ、2日間で1万人を超える人出があった。また、高校生が出店するということで、地元テレビ局や新聞社からの取材を受けた。



生徒や先生方も前日から準備を行って2日間で250食のそばを用意したが、いずれもあっという間に完売した。早い時間に売り切れることも予想されたため、2日とも午前10時からと12時からの2回ずつ、それぞれ50～75食に分けて販売したが、いずれも10分から30分で完売してしまった。完売後も生徒の打ったそばを求める来場者の声が多く寄せられたが、今の体制では今回の数が限界であり、今後そば打ちに興味を持つ生徒を増やしていく必要性を感じた。

### 【事業に対する反応】

これらの取り組みを通じて、地元の新聞社やテレビ局には様々な機会に取り上げてもらったことで、事業実施前に比べて「耶麻農業高生のそば打ち」に関してはかなり浸透した。

また、試食研究会等で実際にそば打ちを見て、食べた参加者からは、ほとんどが好意的な意見を得た。

### 【まとめ】

今回の事業を行った結果として、「そば」と「農業高校生」を組み合わせた取り組みは、高校にとって地域にとってもプラスの効果が見られた。

生徒にとっては、自分の打ったそばを目の前で食べてもらう緊張感と、「おいしい」と言ってもらい喜びが積み重なっていくことで、事業が進むごとに自信をつけていく様子が見て取れた。

一方、地域最大のイベントの一つである「そばまつり」については、地元の高校生が出店することが話題にもなり、一定の貢献ができたと考えている。地域の住民が高校生の活躍を家族のように応援してくれる様子も見られた。

また、単純に比較はできないが、平成 29 年度の耶麻農業高校の入学希望者数は、28 年度の入学者数を大きく上回った。（ H28 入学者数 38 名 → H29 入学希望者数 58 名 ※ ）

※H29.3.17 時点。これには、喜多方市内で平成 29 年度の募集定員が 1 学級分（40 名）減る高校があることも関係していると考えられる。

今後は、耶麻農業高校としてそばまつりへの出店を継続することに加え、試食研究会のような小人数を対象にした そば打ちの機会を増やすなど、高校生レストランのそばバージョンとして同校が進める取り組みを支援する。

また、希望する生徒へのそば打ち技術の指導機会を増やすなど、同校内のそば打ち人口の拡大促進を図る。

さらにこれらを通じ、同校の卒業生を含めた山都地区内の若手そば打ち経験者の増加を図り、「そばの里」活性化に向けた事業を継続的に展開できる体制づくりを目指していきたい。

最後に、今回の取り組みを支援いただいた北陸地域づくり協会に深く感謝申し上げます。